JISSEN
No.10
TAKE FREE

CONTENTS

03-09　新たなる仏教者の実践のあり方を巡って -後-

10-11　SORYO FOR EVERYTHING
　河上 秀朗
　長田 晃声

12-13　常識のカベ
　老いについて考える

14　PRACTICAL ACTIVITIES

15　法話
　西明 大智

編集長　加藤 文彌
編集者　足利 大輔　栗田 弘智
　帰依 龍也　小島 かるな　吉水 昌洋
写真　天﨑 仁紹　安武 慶哉
デザイナー　小野 優菜
アートディレクター　西明 真弥（近畿大学 文芸学部）
スペシャルサンクス　柿原 光暉　梯　妙花　河上 秀郎　長田 晃声
　西明 大智　藤尾 見吾　山本 顕生

『JISSEN No.10』

2019年 10月 発行
発行：実践真宗学研究科 出版活動部会

〒600-8268
京都市下京区七条大宮東入大工町 125-1
龍谷大学清風館 3F 実践真宗学研究科合同研究室
TEL 075-366-0621

*この活動情報誌「JISSEN」は、龍谷大学実践真宗学研究科の院生が、実習の一環として主体的に取り組み発行するものです。

新たなる仏教者の実践のあり方を巡って-後-

現代社会で、宗教はいま厳しい状況下にある。
その中で仏教者は、仏教に関心のない人にどうはたらきかけられるのか。

今回、仏教の専門家・アイドル・学生という特色ある5人が集まり話し合っ

てら＊ぱるむす
文殊たまさん　勢崎至恩さん

龍谷大学
亀山隆彦先生

龍谷大学 実践真宗学研究科
小野優菜　足利大輔

仏教とファンをつなぐ「てら＊ぱるむす」

亀山　ファンの皆さんの仏教理解についてですが、池口さんのブログ*1に「ファンが「てら＊ぱるむす」さんのライブを見て、仏教に関心を持つようになった」といったことが書かれていましたよね。例えば、「てら＊ぱるむす」さんの『ニルバーナ恋バーナ*2』という曲には、フックになるリフレインに、西方浄土といった仏教用語が入っていますが。

勢崎　「ぎゃーてーぎゃーてー」というところですよね。

亀山　そういったところが、たぶん引っかかりになって、理解したいと思うファンが沢山いて、そこから法要に参加したいという人も出てきている。これは、すごくいい流れだと思いますね。

ただ、アイドルのファン、特に男性ファンはやはりすごく両義的な存在なので、アイドルと繋がれば繋がるほど、いわゆるガチ恋勢*3のような問題も出てきたりするかと思います。

誤解しないでいただきたいのですが、「てら＊ぱるむす」のファンの皆さんがそうだと言っているわけではありません。そうではなくて、ファンが仏教に近づいて行くことと、「てら＊ぱるむす」というアイドルに近づくことが並行することによって、ファンと「てら＊ぱるむす」の関係性もすごく多様になってしまいますよね。そういう意味で、「てら＊ぱるむす」さんから見て、ファンの皆さんとの関係はどうなのか、またファンの仏教理解はどうなのか、この点をちょっとお伺いしたいのですけども。

文殊　ファンの方に関して言えば、もともと仏教が大好きな方がお寺のライブを見て、「てら＊ぱるむす」のファンになった、という方もいらっしゃいますね。

勢崎　ファンの方々にも、一方では、元からアイドルのファンで、私たちを見て「てら＊ぱるむす」や仏教が好きになった人、また、もともと仏教が好きで、アイドルのオタクじゃなかったけどアイドルのオタクになったという人、という二つのパターンがあると思います。だから、アイドルの現場にあんまり行かない人、仏教が好きだから「てら＊ぱるむす」を推しているという人は、お寺でライブをすると来てもらいやすいのではないかなと思います。逆に、アイドルオタクの方は会場が変わってもあまり問題は無いのかなとも思います。

文殊　ですので、仏教の理解っていうのは、その入口が違

*1「浄土宗龍岸寺　住職の新しいお寺づくり」
http://ryuganji.jp/category/oteramaking/（閲覧日2019年2月23日）
*2「てら＊ぱるむす」1stシングル。
*3 本気でアイドルに恋をしているファンのこと。
参照「numan 用語集」https://numan.tokyo/words/Zpz1（閲覧日2019年2月23日）

ファンが仏教に近づくきっかけに――…

ったら全然違うと思います。ファンの方の仏教の思想とか考え方への理解に関して言えば、例えば観音菩薩の観咲千世乃が一時期少し活動休止だった頃に、ファンの方みんなで観音巡り*1をしようという企画を立てたりしまして。

亀山　そういうことをやっているんだ。

勢崎　ファンの方々はお寺に行けば私たち(菩薩)に会えるんですよ！笑

文殊　仏像として私達はいるので。

足利　なるほど。笑

文殊　奈良の安倍文殊院*2には私の元国宝版*3がいる、みたいなぐらいの感じで言っているんです。

勢崎　ですので、意外にも私達のいない時は観音巡りをする、みたいなことをやっていらっしゃる方が多いですね。

文殊　私達のファンの方にはいわゆるガチ恋勢という人は正直ありがたいことにいないですね。あと私達も恋愛みたいなことに関しては、本当に無関心というのもあります。

亀山　本来超えている存在ですからね。

文殊　そうなんですよ。ですので、ファンの方にも理解はしていただいているのと、結構ファンの方々もいろんなことに興味のある方ばかりなので、私達だけじゃなく他のアイドルさんや全然違うアーティストさんが好きだったり、別の現代美術が好きだったりみたいな感じで、広く楽しく「てら＊ぱるむす」に関わってくださるので、アイドルとしての危険な面というのは、「てら＊ぱるむす」には全く無いですね。

亀山　なるほど。ファンが仏教に近づくということも無理なく出来ているということなんですね。

文殊　そうですね。

勢崎　あとファンの人達はみんな仲良いんですよね。みんなでご飯食べに行ったり、結構いろんなことされたりしているので、コミュニケーションの広場みたいにもなっているのかもしれないです。

足利　僕は観音巡りの話が面白いと思いまして。というのも、観音の仏像とアイドルメンバーの観咲千世乃さんがいわば同率になっているわけですよね。つまり仏像っていうのは宗教的な思想や感情の、ある種の表象ですが、それが伝統的には仏像であったものが、現代においてはアイドルとして出てきたという風にも認識可能なのではないでしょうか。

文殊　それこそアイドルは偶像って言いますもんね。

足利　そう、偶像ですよね。僕はそこに面白味を感じました。そこで亀山先生にお聞きしたいのが、先生は現代美術と仏教思想が架橋になりうる可能性について考えていらっしゃいますが、仏教思想から生まれる仏教芸術というのは、どういう結びつきで生まれるのか、つまり宗教的な表象が美術として生まれるプロセスというのは、仏教においてはどういうものなのでしょうか。

亀山　例えば、仏教の縁起と業(カルマ)の教えは、耳で聞いただけではなかなか分からないので、そのエッセンスをパッとわかりやすく、直感的に伝えるために、物語にしてしまうことがあります。今昔物語など、説話と呼ばれる文学の中で、「因果応報」などと言われるのは、そういったところから出てくるわけです。ですが、文字だけでは寂しいから、その因果応報を絵にしようという動きが出てくる。さらに、それを「絵解き」と呼ばれるパフォーマンスにしていくこともある。

　他にも、仏教美術の成り立ちにはいくつかパターンがあって、一つは、お釈迦様や各宗派の祖師を称える、つまり、祖師がいかに素晴らしかったかを表現する美術が、先ずメインとしてあり、また、教えは言葉だけでは伝わらないから、それを絵で表現する、さらに、説話文学みたいなものや説話の美術のようなものもある。

*1 近畿地方を中心に散在する33の寺院、西国三十三所の観音霊場を巡礼すること。西国巡礼。
　または、西国巡礼にならって、各所の観音堂を巡拝すること。
*2 大化の改新に創建された日本最古に属する寺院。華厳宗東大寺の別格本山としてその格式も高い。
*3 安倍文殊院の本尊文殊菩薩は、4人の脇侍とともに国宝に指定されている。
　木彫極彩色の騎士像で、右手に降魔の利剣を持ち左手に蓮華を持ち獅子に乗っている。
　快慶の作と判明している。

亀山　もう一つ、これが一番難しいのですが、弘法大師空海*1という人がいらっしゃって、その空海の伝えた密教の教えというのは、いくら口で言っても伝わらない。だから、まずは曼荼羅*2を見てくださいというところから、いわゆる曼荼羅が生まれた。もちろん、空海が曼荼羅を作ったとかそういう話ではなくて、曼荼羅という絵画自体に、教えが凝縮されているということです。だから、曼荼羅を「一覧」する、つまり、ちらっと曼荼羅を一回見ただけでも、その功徳は物凄く大きくて、成仏も出来るということを空海は言っています。そういう意味で、曼荼羅は、教えと相互に関係を持っており、教えを直感的にとらえられるような絵図として使われているという側面があります。

　あと、もう一つ重要なのは、仏像にも思想があるということです。仏像と生身の人間の区別には、実は結構難しい部分があり、例えば、説話などを読むと、中世の人達は、仏像を生きたものみたいに扱うわけです。だから、善光寺*3の阿弥陀仏は生身*4（しょうじん）と呼ばれて、あるいは、京都嵯峨の清涼寺*5の釈迦如来*6も、「生身の釈迦」といって、つまり、生きた釈迦と言われたりして、仏像の中には内臓の模型が入っている。そういう意味で、仏像は、それ自体が生身の存在、生身の救世主であり、仏教の専門的な言葉で「変化身*7」といいますが、この世に変化して現れ、肉体をもって助けてくれる存在と理解されます。だから、思想が仏像になり仏像も思想になる。そういう意味で、アイドルの菩薩としての原型は、「生身」ということですよね。ただそう単純に言ってしまうと、仏教学の人から怒られるかな。笑

組織的に仏教を伝える

足利　でも、そういう解釈も出来なくはないわけですよね。伝統的な仏教の思想というものがアイドルを通して伝わるというのは難しい部分はあるでしょうが、「仏像における生身」の話などを聞いて、可能性はあるかもしれないとも思いました。ですので、伝統的な仏教の思想とアイドルという、「入り口としての実践」とを繋げるということが、今回のテーマである「入り口に留まることのない新しい仏教者の実践の在り方」に繋がるものになると思うのですが、「てら＊ぱるむす」さんは、そのような

*1 平安初期の僧。真言宗の開祖。延暦23年（804）に唐に渡り、長安で密教を学び、帰国後、真言密教を日本に伝授した。
*2 梵語マンダラ（mandala）の音訳。密教で、法身大日如来のさとりの世界を表すために、仏・菩薩などを体系的に配列して図示したもの。（『浄土真宗辞典』本願寺出版社）
*3 長野県元善町にある寺院。現在、天台宗大勧進と浄土宗大本願の二坊が管理している。中世以降、広く民衆の信仰を集め、一大霊場となった。現在でも年間約600万人もの参拝者が訪れている。
*4 諸仏菩薩が衆生救済のために、通力によって仮に現わす肉身。
*5 京都市右京区にある浄土宗の寺。山号は五台山。奝然（ちょうねん）が宋から持ち帰った釈迦像を安置して弟子の盛算が一寺とした。
*6 木造釈迦如来立像。清涼寺にある北宋代の彫刻。国宝に指定されている。高さは162cmある。胎内には、模刻されたときに納入された絹の五臓六腑が入っていた。
*7 応身と同じ。衆生を救うために無際限の中で仮に際限をもって示した仏身。『岩波仏教辞典』（第二版）の説明によれば、「変化」とは「万物の相が種々に変じること。仏教では、種々に形を変えて現れること、神通力によってさまざまな姿に変わること」をいい、その「変じたその身体を〈変化身〉」という。

ところで何か考えていることはありますか？

亀山　もう少し具体的に言えば、例えば池口さんはブログの記事を、文殊さんや勢崎さんが書くものは入門編で、自分が書くものは突っ込んだものというように差別化していますよね。それで「「てら＊ぱるむす」に関心を持って来ていただいた方を知恩院*1にお連れしたい、なんて考えています」みたいなことをブログで最初に書いていたりする。そういう役割分担みたいなことを、池口さんと話し合われたりしているのでしょうか？

文殊　いろんなミーティングはしているのですが、先ず私達が入り口としてあって、ライブの時のMCなどでライトな知識みたいなものを披露したりしています。一方で法要をあげてもらったり、「こういうお経を読んでいました」など踏み込んだ内容を話したりすることは、池口住職がしています。というのもそもそも私たちが仏教者や布教者ではないというのもあり、自然にそういった役割分担になっていきました。

足利　話し合いはされていないけど、組織的に「てら＊ぱるむす」は入り口としての役割を担っていて、そのあたりは意識されているということですね。

勢崎　そうですね。私たちがそれをやらないと、私たちがいる意味がないというか、やる意味がないというか。

文殊　私たちもやっぱり全部知っているわけではないのでその入り口からさらに勉強ができる。

足利　勉強したことを発表する機会というのがMCということでしょうか？

文殊　基本MCは自分たちの発表会ですね。

亀山　たぶん作詞もじゃないですか？

文殊　そうですね、ただ『ニルバーナ恋バーナ』は池口住職に書いていただいたんですけど、他の曲は自分たちで作詞しています。ですが、池口住職にいろいろアドバイスをいただいたりしていて、例えば『花つぼみ』っていう曲にはお経が入っているんですが、それは池口住職から「ここでお経を入れてみたら」ってアドバイスをもらって書きました。そういう感じで、いろいろ教えて頂きながら勉強したことをMCや歌詞に詰め込んで発表しています。

勢崎　あと木魚をお客さんに叩いてもらうっていう体験をライブでしたり、実際にもっと叩きたかったら、実際に法要をやったりするから、お経を称えながら叩いてみようってしています。「てら＊ぱるむす」のライブでは、「こんな好き勝手叩いちゃうけど、本当にいいの？」って思っているあなたは、ぜひちゃんとしたところでやってみたらいかがっていう感じで。

足利　そういう伝統的な法要とかにも、一応導線は貼っていらっしゃると。

亀山　それはすごく面白い話で、興味深いなと思うのですけど、最初に組んだ時は、不安定なイメージで入ったのに、今では結構「ぜひお寺に」みたいな感じになっていますが、その契機が気になりますね。

文殊　そうですね。中盤から本格的にアイドル活動を始めるときに最初ミーティングで「やるからにはやろう」みたいな活動方針を話し合ったので、そこから先ず考え方を変えましたね。ライブハウスでライブをさせてもらえる話も出ていたので、「私たちはお寺でやってるアイドルだけど、お寺に来てもらわなかったら意味がないから、お寺を頑張ってバンバンPRしていこう！」っていう話になったのがきっかけです。

亀山　じゃあ、そのアイデアは途中で出たんだけど、初期の頃の経験は大きかった。それで、その頃から継続しての文殊さんということですか。

文殊　はい、私ですね。

1st Single「ニルバーナ恋バーナ」
現在は入手不可（てら＊ぱるむす公式サイトより）

*1 浄土宗の大本山。法然が専修念仏を創唱した吉水の草庵や、示寂した大谷の禅房があった地に、文暦元年（1234）、法然の門弟源智が法然の遺骨を改葬して、諸堂を建立し知恩院大谷寺と称したことに始まる。

小野　それによる反応はどういったものでしたか？

文殊　そうですね、やっぱり元いたメンバーが一人でもいると、安心される方ってすごく多いんですね。アイドルオタクにもいろいろありますが、グループ自体が好きだから追う方もいらっしゃれば、推していないメンバーしかいなかったら、もういいやという方までいらっしゃるんですけど、ありがたいことに「てら＊ぱるむす」には継続メンバーがいたので、ずっと応援してくださった方も継続して応援してくださっています。

地下アイドルなどの現代のアイドル文化って、一緒に成長していくとか成長していくのをみるのが好きという方が多いので、それもあってアイドルグループの成長と共に、徐々に盛り上がっていくというのがあるんじゃないかなと思います。

足利　中盤から本腰を入れて活動されたわけですが、冒頭でも言われた通り、宗教離れという状況の中で、アイドルとして仏教を伝えていく活動の中で、状況の変化みたいなものは感じられましたか？

また、伝統的な部分とも導線を繋げて活動されてきた中で、「よく言われている言説とはちょっと違うな」といったことって感じることやあるいは仏教に全然興味なさそうなアイドルファンの方が仏教に興味をもったりするといった実感などはあるんでしょうか。

勢崎　すごくありますね。ライブの後の物販のときに、「こういう教本買ってきたよ」とかとか言ってもらえたりします。他にも、「私の菩薩色をした数珠を買ってきたんだ」とか、「観音菩薩が入っているんだ」とか。

文殊　また、もともと仏教に興味がなかったわけではないけど、一回「てら＊ぱるむす」を見てみようとなったときに、実は仏教が好きだったんだよねって言ってくださる方もいらっしゃったりとか。

足利　潜在的な仏教オタクがいて、それを発揮できる場としてもあったわけですね。

文殊　そうですね。

勢崎　あと、すごいなと思うのが、例えばあるメンバーが卒業しても、そのメンバーのファンの方は「てら＊ぱるむす」のファンとしてまだいてくださるんですね。推しが卒業しても、ずっといてくださる方はいらっしゃる。そういう方は、たぶんファンの中でコミュニケーションの輪ができていて、推しがいなくても来てくれるんだと思います。

足利　一つのコミュニティとして「てら＊ぱるむす」が機能しているわけですね。

仏教アイドルは〈サブカルチャー〉から生まれる

亀山　あと重要なことは、仏教とアイドルを考えるときに大切なポイントが二つあって、一つは、例えば先程「推し」という地下アイドル独特の用語が出ましたが、そこから伺えるのは、まず地下アイドル文化が成熟していて、それが前提となって、仏教アイドルなるものがある、ということですね。だから、ぼんやりと「アイドルと仏教」と語るのではなくて、〈地下アイドルカルチャーの上に仏教のフォーマットをのせている〉とはっきり認識するべきではないでしょうか。

もう一つは、「超十夜祭*1」で「超」という言葉を使うあたり、池口さんは、「ニコ生*2」とかすごく好きな人なんだろうなと感じました。だから、二〇〇〇年代から二〇一〇年代のニコ生とか地下アイドルカルチャーの一つの成熟したフィールドの上にお寺文化をのせていって活かしていく、「仏教アイドル」とは、そういう方法論の話なのではないでしょうか。

文殊　池口住職は「てら＊ぱるむす」を作った人だけど、もともとアイドルが好きな人ではなかったんですよね。でもそのサブカルチャーみたいな

*1 2018年10月13日から11月18日の期間に行われた龍岸寺による仏教イベント。詳細は池口住職によるブログ記事「超十夜祭はなぜ「超」なのか」
http://ryuganji.jp/why_chojuyasai/（閲覧日：2019年2月25日）
*2 株式会社ドワンゴによるサービス『ニコニコ生放送』の略。

ものをすごく吸収される方なんですよ。例えば、知恩院さんのお坊さんが飛んでいるポスターご存知ですか？あの広報部長は池口住職なんですよ。そういうバズる要素とかを日々新しく新しく吸収されているので、好きか嫌い関係なく、サブカルチャーをすごい勉強されている方ですね。

亀山　そういう意味で、現代の文化と仏教をただ組み合わせればいいという問題ではなくて、もうすでに成熟した地下アイドル文化が前提にあるから、「てら＊ぱるむす」の活動はある程度成立している。だから、「地下アイドル」という文脈を外して「仏教アイドル」を語ることは、本来無理なんですよね。

足利　その話で言えば、例えば『テクノ法要』は、もともと朝倉行宣さんはDJをしていて、作曲もされている人なんですよね。DTM *1というデスクトップで作曲する文化って日本では結構盛んですが、朝倉さんの作っているテクノ法要の音って日本的なトラックメーカー*2の音に近いと思います。つまり、DTMのカルチャーがあって、その延長線上に『テクノ法要』があるともみれるんですね。そういう部分と亀山先生の話とはつながるかなとも思います。

亀山　あと、今日話を聞いて

難しいと思ったのは、「てら＊ぱるむす」の活動は、お寺とか仏教のことを言いすぎると、「てら＊ぱるむす」のアイドルとしての活動の重要な部分がわからなくなってしまう。地下アイドルであることが、一方で重要なんでしょうね。

勢崎　新聞などからよく取材してもらえますが、やはり伝えてほしい内容とは違ったものが記事になっているというのはありますね。

文殊　やっぱり「お寺で活動しているアイドルグループだ」というので、注目してもらえることはありますが、一地下アイドルとして「お寺をコンセプトとして地下アイドルとしてやっている」という取り上げ方をされたことがないので、アイドル文化や地下アイドル文化を知らない方は、「また寺でアイドルやってるんだな」ぐらいの認識だったりすることはありますね。

亀山　やはり、地下アイドルのある種のメソッドをお寺に持ち込んで、〈仏教×アイドル〉を成立させているということが、すごい重要なポイントですね。だから、さっきの仏像とアイドルを同一視していくような話は、チェキなどにみられる、ある種の「地下アイドルの独特の信仰」といえるものがあるけど、それが置き換わったものかも知れませんね。

そして、それは若い人達の文化で、「ユースカルチャー」といっても、例えばイギリスのパンクロックとか、アメリカでいえばヒップホップとかいろんな形があるわけですが、「地下アイドル」は、日本のユースカルチャーなんですよね。それがわからなければ、ちゃんと評価できないかなと感じますね。

文殊　私もそう思います。

足利　あとオタク文化でよく言う「二次創作*3」も重要なタームだと思いますね。つまり、アイドルのカルチャーにおいて仏教という要素を自分なりの解釈をして、自分なりの仏教的な表現をする、ある種の二次創作として表現する、「てら＊ぱるむす」にはそういった構造もあると思います。

文殊　ある意味、私でいう文殊菩薩も「二次創作」みたいなところがありますし、それはありますね。

*1『DTM用語辞典』(藤本健・大坪知樹著 BNN社 2018年)によれば、DTMとは「Desk Top Musicの略で、机の上で曲作りを行う制作スタイルのこと」で、そこでは主にパソコンが使用される。
また「1980年代後半のDTM黎明期は、パソコンが一部で普及しはじめた時期」であり、音楽制作用のパッケージも発売され、DTM人気に火がついた。

*2 ポップカルチャーのメディアである『KAI-YOU.net』では、「トラックメイカー」を「ヒップホップやテクノ等といったクラブミュージックにおける作曲家」と定義している。
「トラックメイカーとは」https://kai-you.net/word/ トラックメイカー 閲覧日：2019年2月25日

*3「二次創作」とは原作のマンガやアニメ、ゲームの設定の一部分を抜き取り、読み替えて、別の物語を制作する創作活動のこと。
東浩紀『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』講談社 二〇〇一年

新たなる仏教者の実践のあり方を巡って

新たなる仏教者の実践へ

足利　サブカルチャーは本当に興味深いですね。そういえば、もうそろそろ文殊たまさんはご卒業を？

文殊　そうなんですよ、「てら＊ぱるむす」を卒業することが決まっていて。（二〇一九年二月現在）

足利　卒業したあとは今までの活動をどう継続されていくのでしょうか。

文殊　実は卒業してからのことはまだ全然考えていなくて、今の活動に全力を注いでいますね。ですが、関東のほうのお寺にも興味があったりするので、一度活動休止してお休みいただいている間に、そういう踏み込めなかったお寺さんなどを一回まわってみたりだとか、日本で一番お寺の多い愛知県にいってみたりだとかしてみたいなと思っています。

また、お坊さんと何かコラボしていろいろやってみたいと思っています。例えば、稲田ズイキ*1さんは『フリースタイルな僧侶たち』のウェブ版の編集長になられた若いお坊さんです。また、カレー坊主*2さんという方もいらっしゃたりしますが、そういう何か面白いことされているお坊さん達にコンタクトとって、話を聞きたいなと思っています。

あとこれはここで初めて言いますが、どうしても「てら＊ぱるむす」は京都を拠点にしているので関東のほうには行けなかったりして、だから卒業はしても「てら＊ぱるむす」のために関東に遠征してみようかな、みたいなことは考えたりしてて、「浄土系アイドル東バージョン」みたいな感じでやっていきたいなと思っています。

足利　なるほど。勢崎さんは？

勢崎　私はこれまでライブオンリーのことが多かったんですけど、これからはライブのペースを一、二か月に一回ぐらいに緩めて、ライブ以外にタレントみたいなことをしたいですね。そこで私がやりたいって思っているのは、「お寺って敷居高いイメージだけど、実は入りやすい所なんだよ」というのを、お寺さんの本音みたいなところから伝えていけたらいいなって思ってます。

文殊　あと仏師さんとコラボしたいって言ってなかった？笑

勢崎　したい！

小野　え、すごい！

亀山　それはちょっと難しくない？笑

足利　頑張りましょう！笑

そろそろお時間となりました。当初「てら＊ぱるむす」に入る前は仏教には興味がなかったところから、「てら＊ぱるむす」の活動通して、卒業しても、あるいは体制が変わっても、お寺に取材に行かれたり、仏師さんとコラボしたいという思いだったり、仏教やお寺に関わっていただくということで、何か仏縁を感じるようないい座談会ができたのではないかと思います。本当に今日はいい話を聞かせていただき、ありがとうございました。

*1 僧侶兼ライター編集者。京都にある浄土宗 称名寺の副住職でありながら、寺に定住せず様々な企画をしている。また『フリースタイルな僧侶たち』のWeb編集長を担っている。
参照「稲田ズイキ｜note」https://note.mu/indmzk　閲覧日2019年2月26日

*2 浄土宗の僧侶、吉田武士のこと。吉田は「カレーという国民食を通して、お寺や仏教、お釈迦様をもっと身近に」をテーマに、カレーと仏教を掛け合わせた活動を行っている。
「宗教は会社員に役立つ」一般家庭出身のお坊さん・吉田武士さんがカレーで布教活動に取り組むワケ」
https://irorio.jp/nagasawamaki/20181118/505299/　閲覧日2019年2月26日

SORYO for Everything

震災はまだ終わっていない

今回、私の個人的な東日本訪問を文章にして欲しい、というお話を頂きました。そこで、昨年夏の私の体験に少しだけお付き合い下さい。

二〇一八年八月末、私は東日本大震災で被災した地域において今なお積極的に支援活動を続けていらっしゃる金澤豊先生のご厚意で、現地を訪れる機会に恵まれました。

現地では、当時の傷跡が未だに根深く残っている事実を目にすることで、如何に悲惨な現実があったのかということを、改めて知りました。そんな中、今でも鮮明に覚えていることが、現地の仮設住宅に住む方々へと向けた、とある傾聴ボランティアに実際に参加させて頂いたことです。

それは「陸前高田市傾聴ボランティア こころのもり」という名称のボランティアで、市内各所の災害公営住宅や、応接仮設住宅等への訪問を主な活動内容としています。「こころのもり」の「もり」とは「守(もり)」という意味が込められていて、会員の一人一人が悲しみや憤り、悩みを抱えた人々に寄り添い、こころを守りたいという理念の下に活動されているのです。

当初、傾聴ボランティアというのが具体的にどういった活動であるのかよく理解していませんでしたが、本当にただ仮設住宅に訪れて話を聞くというシンプルな活動でした。ですが同時に、この話を聞くというのが大変で、いかに会話の中で相手が心に抱え込んでいるものを引き出していくのかという、とても一筋縄ではいかない活動であるとも感じました。活動は基本的に二人一組で行われ、私は活動の経験が豊富な現地の方とご一緒させて頂きましたが、ある程度場数を踏んだ方でも、仮設住宅に住んでいられる方々とのコミュニケーションに難しさを感じられていました。この活動自体は、各地の仮設住宅に住まわれている方が健康的に生活を送っておられるかという確認をするという目的も含まれているそうですが、一貫して快く受け入れて貰うことが難しかったと印象に残っています。最初から快くという訳にはいかず、現地の会員の方に聞くところによると、やはりこういった訪問活動を拒否されている方もいらっしゃるそうで、断られることも珍しくはないということでした。

傾聴を目的として訪問する側としては、ある程度自らの身分が明るいことを自負しているでしょうが、訪問される側にとってみれば関係ありません。加えて、震災に便乗するように勧誘活動を始めた新興宗教への不信感が、訪問者に対する抵抗感を生んでしまっているというのも原因の一つでしょう。

東日本大震災から時間が経って、関西に住んでいる私達にとっては過去の災害であっても、震災によって多くを失った現地の人々の心境は未だに被災の真っ只中でした。現地の新聞社の方とお話をする機会を頂いた折に聞かせて頂いた話ですが、未だに現地の新聞では毎日必ず震災に関する記事が新聞のどこかに記載されているそうです。被災地に住む当事者の私達があの悲惨な出来事を忘れてはいけない、という決意の表れということでした。

震災はまだ終わっていない。メディアに頼らず、自らの肌でそう実感することができただけでも、東北を訪れた甲斐があったと確信しています。

実践真宗学研究科　二年次生
河上秀朗

発達障害に向き合う

今、自分が研究していることは、「発達障害の当事者に対して僧侶のできる支援」について調べています。

研究するきっかけとなったのが自分が発達障害の当事者でもあるからです。この事を公にするのは本誌で初めてです。

そもそも「発達障害」とはどのような病気なのか、これから説明していきます。主に発達障害には三つに分類されています。

一つが「自閉症スペクトラム障害(ASD)」といわれる発達障害です。この障害の特徴は、「相手の声や状況を察するのが難しい」「発言が一方的」「特定のものに対するこだわりが強い」「ものの形や図柄が変わらないものを好む」などといった特徴があります。

次が「ADHD(注意欠陥・多動性障害)」という発達障害です。この症状の特徴は、「不注意(集中力がない)」「多動性(じっとしていられない)」「衝動性(考えずに行動してしまう)」「混合性(不注意・多動性・衝動性全ての特徴が出ている)」といった症状が表れます。例えば、「忘れ物が多い」「衝動的な言葉が多い」「ケアレスミスが多い」などといった特徴があります。

もう一つが、「LD(学習障害)」という発達障害があります。この学習障害は主に、三つあるといわれています。それが、「読字障害(文字の意味を理解しながら読むことが苦手)」「書字障害(文字の意味を理解することはできるが、書くことが苦手)」「算数障害(数字の計算・推論が苦手)」と分かれています。

また、発達障害の三つ全てを抱えている方も中にはいます。

これらそれぞれの特徴をもっている人は、得意不得意の差が大きく表れます。そのため「やればできる」「これはできてなぜこれができないのだ」「努力が足りない」といわれるため当事者にとってはすごくつらいことです。当事者の方は、「他人から言われていることは分かってはいるが、いくら努力してもできないことはある」ということも理解していただければ幸いです。

近頃、発達障害がメディアに多く取り上げられているため、発達障害に対する認識が広まったためか「もしかしたら自分は発達障害なのでは?」という疑う人も多くなりました。そのことを知った時、これから発達障害の方々の「居場所」も必要になってくるのではないかと思うようになりました。

ちなみに現在では、発達障害の当事者会が全国各地で開催されています。当事者会の主催者のほとんどが発達障害の当事者です。開催している場所が、地域の活動センターの会議室を借用し開催することや、発達障害者の方が運営しているカフェバーでの開催が多いです。その中で、お寺や教会などといった宗教施設で開催された事例はまだ見たことがありません。その理由としては、やはり宗教に対する抵抗感があるからだと思います。

しかし、お寺などで当事者会などを開催することで、少しでも「居場所」になる可能性もあるのではないかと考えています。発達障害ならではの生き辛さを聴き、現代社会とは隔離された非日常空間を提供できるのは宗教者だと思います。そして、発達障害の方々の「死にたい」と思う苦痛に寄り添えることは、宗教者でもできることではないかと思います。宗教者は死と向き合えるが、カウンセラーは死と向き合うことから逃げることができると教わりました。

前述しましたが、自分は発達障害の当事者(ADHD)でもあり、浄土真宗本願寺派の僧侶でもあります。これから僧侶として発達障害の方々の生き辛さに寄り添い、日常から隔離されたお寺の空間で休んでもらいたいと思っています。また、発達障害の当事者一人一人に合った支援もできるように研究していきます。

実践真宗学研究科　二年次生
長田晃声

参考文献：私たちは生きづらさを抱えている-発達障害じゃない人に伝えたい当事者の本音
姫野桂著 五十嵐良雄監修

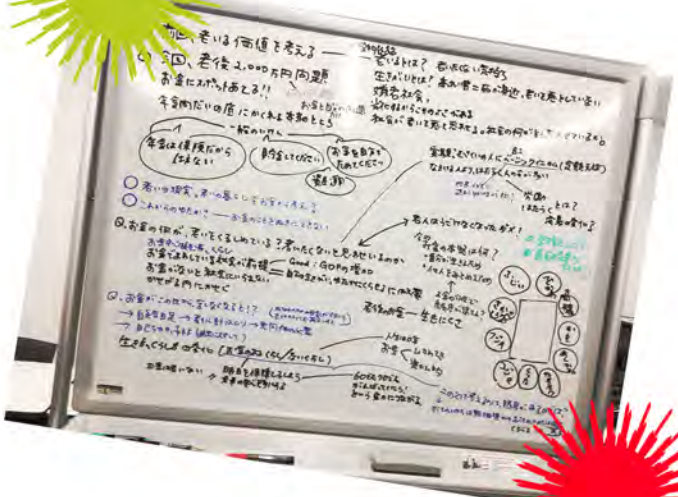
常識のカベ

「老い」という言葉を聞いてどんなことを思うだろう。
身体が思い通りに動かなくなる？仕事ができなくなる？
家族の負担になってしまう？自分は老いたい？老いたくない？

現代社会において「老い」とは何なのだろう。
多くの人が老いたくないと思うのはなぜなのか。
何が老いたくないと思わせているのか。

めまぐるしく変わっていく現代社会において、もう一度常を見直して自分たちの生き方を考えていく『常識のカベ』。２０１７年から活動を開始したが、今年度はテーマを「老いの価値を考える」と題して、６月から10回に分けて開催されている。常識のカベ実行委員会と、龍谷大学大学院実践真宗学研究科の有志メンバーが主催し、龍谷大学東黌を会場とする。

第１回の６月は「老いたくない気持ち、について考える」をテーマとして、そもそも老いとは何か、なぜ老いたくないと思うのかという根本的な問題について議論した。「老い」に対してはマイナスのイメージが多く、嫌老社会とも言われる。しかしそれは「死」を先に見て老いたくないというのであって、死が身近な人ならむしろ老いることを肯定的にとらえられるのではないかとの意見が出た。それを受けて今回は、より現実的な視点からせまるために「お金」の問題から老いを考えることになった。タイムリーな話題として「老後二千万円問題」をとりあげ、老いの現実を見つめなおした。



参加者は学生を含む９名で行われた。最初に、老後３０年を生きるには年金以外に二千万円が必要であるという金融庁の報告書によって、世間に波紋が広がった「老後二千万円問題」を振り返った。この問題をきっかけに、世の中では様々な議論がおこっている。しかし、年金や資産運用といった表面的な問題に注目が集まっても、もっと根本にある「老い」ということには関心が向けられない。こういったことが大きな問題となるのはなぜなのか、お金の何が老いたくないと思わせるのかについて話し合った。

ある参加者は、社会ではお金が中心に回っていて、お金を使わないと生きていけないという仕組みが前提にあり、お金のサイクルに入れなければ社会からはじき出されてしまうのではないかと述べた。そこで、最低限の生活を保障するお金が支給されたらどう生きるか、ということを想像した。月に二十万円を支給された場合、それを元手に資金運用してお金を増やしたい人、貯金したい人、やりがいのために変わらず働き続ける人、働かずに好きなことをしたい人など、それぞれの考え方が見られた。

生活に必要なだけのお金が保証された結果、やりがいがなくなったり向上心が失われたりするという意見、反対に将来を保証するお金が与えられれば、老いることへの恐れがなくなるのではないかという意見もあがった。そこで、お金を増やしたり、経済を回したりしなければならない必要はどこにあるのかという議論に展開した。

また仏教の視点から、現代のような、お金が中心に回っている社会を釈尊や親鸞聖人はどう見られるか、経済発展が常に求められることをどう思われるかということにも話が及んだ。そういった話のなかで、世の中の経済活動から少し離れた場として、寺院などのコミュニティが果たせる役割があるのではないかとの意見もあがった。

経済発展していくことが幸せという価値観ではなく、これからは世代に関わらず一人一人が働き方、生き方を模索していく必要があるのかもしれない。

このようにして第2回は「お金」という問題から老いを考えたが、それぞれの立場から意見が共有され、話し合いは尽きなかった。また会は終わってもそれをきっかけとして個人で、または参加した人同士で考え直すのも面白い。

次回も引き続き「老後二千万円問題」をテーマに考え、1年を通して「老い」について議論を深めていく。ぜひ参加されて、「常識」を見つめなおしてはいかがだろうか。

文章：小島かるな

PRACTICAL ACTIVITIES

いま、ここで、実践する僧侶たちの挑戦

JISSENJYA

Jissenjya Projectは、２０１４年から始まり、龍谷大学大学院実践真宗学研究科の有志が集まって活動しています。過去４年間の活動として、２０１５年４月から２０１８年11月までに、計41公演行ってきました。

Jissenjya Projectとは、視聴覚伝道としてヒーローショーによる伝道活動を行っております。主な対象は子ども（３歳〜10歳程度）であり、仏教をわかりやすく、親しみやすく知ってもらうことを目的としています。子どもに興味を持ってもらうための一つのアプローチとして始動しました。

代表　宗本尚瑛

▶▶ jissenjya@ gmail.com

LIFE SONGS

お寺×音楽LIFE SONGS（ライフソングス）は、弾き語り音楽ライブを通して、「いのち」を考える時間を共有するプロジェクトです。実践真宗学研究科の大学院生を中心に運営し、今までお寺や会館、大学の宗教空間など約20公演開催されました。また２０１８年にはハワイ別院やモイリイリ本願寺でも公演を行いました。さらに自主公演だけでなく、ご法座や音楽フェスへの依頼公演も増えてきました。

LIFE SONGS公演の特徴は、ご門徒の方々だけでなく、今までご縁のなかった方々も多く来場することです。来場者からは、「仏教を身近に感じられた」「改めて命や死について考えるきっかけになった」等、多くの称賛の声をいただいています。

代表　柳原遊

▶▶ https;//m.facebook.com/LIFESONGS88/

GUCHI COLLE

「グチコレ」とは「グチコレクション」の略で、京都で仏教を学ぶ学生を中心とした有志のグチコレクターが、街行く人々のグチ（愚痴）を聴き、集め、「他力本願.net」というホームページに匿名で公開していく活動です。

ネガティブに捉えられがちな「グチ」ですが、私たちはグチを本音と向き合うポジティブなものと捉え、気軽にグチを言える社会を作っていきたいと考えています。悩み多き現代人には、ため込んだグチをこぼす場所が必要なのかもしれません。グチコレクターたちは、今宵も人々の尽きない「グチ」を聴いています。

代表　栗田弘智

▶▶ r.guchicollection@ gmail.com

PROJECT DANA

プロジェクトダーナ@JISSENは、２０１８年６月〜７月にかけて発生した西日本豪雨による数々の被害を目の当たりにして、我々僧侶にも何かできるのではないだろうかという思いから立ち上がりました。募金活動から始まり、実際に被害にあった現場に足を運んで清掃活動を行いました。

この取り組みは、日本各地で起こりうる災害や社会問題に対して院生を中心に有志を募り、協力して活動をしています。今後は、各地で発生した自然災害へのボランティア活動を続けるとともに、様々な分野における活動の幅を広げていくことを考えています。

代表　宗本尚瑛

自己中心的な私たち

実践真宗学研究科2年次生　西明大智

悪性さらにやめがたし　こころは蛇蝎のごとくなり
修善も雑毒なるゆゑに　虚仮の行とぞなづけたる
『浄土真宗聖典』(註釈版)617頁

皆さん突然ですが、自分はいいことをしてあげたつもりなのに、怒られたり、傷つけてしまったりしたという経験をしたことはありますか？

例えば、私には次のような経験があります。自分の家によく来る友人がいまして、いつも私の家があまりにも散らかっているので洗い物や掃除をしてくれるのですが、その際に床に散らばったプリント類をまとめてくれたりもします。ただ、ここで問題が発生するのです。私のように部屋が散らかっている人間は、大体どこにどのプリントがあるというのを何となく把握しているのです。それを片付けられてしまうと、そのプリントがどこに行ってしまったかわからなくなってしまいます。その結果、せっかく掃除して部屋をキレイにしてくれたのに、部屋がきれいになった喜びより先にプリントがどこに行ったのかわからないというムカムカした気持ちが出てくるのです。いつもはいい友達だと思っていても少しでも気に食わないことがあるとイライラしたり、時にはその思いを言葉の暴力として他人にふるったりしてしまうのが本当の私の姿であります。

ここでご讃題を振り返ってみたいと思います。

悪性さらにやめがたし　こころは蛇蝎のごとくなり
修善も雑毒なるゆゑに　虚仮の行とぞなづけたる

まず「悪性さらにやめがたし」とは、私の悪を好む性質というものはどうしても止めることが出来ないということです。次に、「こころは蛇蝎のごとくなり」とはこころはまるで毒蛇やサソリのようなものであるということです。そして、「修善も雑毒なるゆゑに」とは、いくら善いことしようとしても、そこには自分の思い通りにしようとする心が混ざってしまうということで、最後に「虚仮の行となづけたる」とはうそ、いつわりの行いと名付けられるということです。つまりまとめると、私の悪を好む性質というのはとどまるところを知らず、まるで毒蛇やサソリのように他人を傷つけてしまう。よい行いをしようと思っても、そこに自分の思い通りにしたいという心が入ってくるので、うそいつわりの行いと名付けられるということになります。

親鸞聖人は唯円が著したとされる『歎異抄』において、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と、どのような修行であっても成し遂げることが出来ない私だから地獄行きが決まったようなものだと仰せになっています。そんな救われるはずもないこの私を浄土へと救ってくださるのがほかでもない阿弥陀仏です。阿弥陀仏は私一人ひとりを救うためにいつもはたらきかけてくださっています。

先ほどどのような修行も成し遂げることのできないといいましたが、その通りだと思います。例えば1日1時間全く怒らない時間を作るという修行があったとします。いっけん簡単そうですが、なかなか出来ないと思います。私の場合好きなアイドルがいるのですが、音楽番組にその子が出ていたとします。一生懸命パフォーマンスする姿はみていてとてもうれしい気持ちになります。しかし、その子があまり映らなかったりするとなんでもっと映さないんだと思ってしまいます。他にも、10分間何も考えないように瞑想する修業があったとしても、10秒もたてばお腹がすいたとか今日は何か予定があったかなとすぐそわそわしてしまいます。このようにどうしようもない私ですが、それでも阿弥陀様はお前を救うぞと、ただただ私に任せよと仰ってくれているのです。この阿弥陀様のはたらきによって私の自己中心の考え方が明らかになり、ただ南無阿弥陀仏とお念仏申させていただく身とならせていただくのではないでしょうか。

合掌

JISSEN No.10

TAKE FREE

Copyright 2019 RYUKOKU Univ.
Graduate school of Shin Buddhist
Studies all rights reserved.